

中学生における薬教育の意識変容について —授業前後および3ヶ月後のアンケート調査の結果から—

玉井 将史 (生涯スポーツ学科 学校スポーツコース)
指導教員 谷川 尚己

キーワード：薬教育，意識変容，学習指導要領

1. 緒言

近年，世界的な医療費増大，人々の健康意識の向上を背景に，平成12年「セルフメディケーション（軽度の身体不調は自分で手当てする）」がWHOによって定義・推奨され，平成20年3月に中学校学習指導要領¹⁾が医薬品教育の充実に向けた改訂も併せて告示された。

そこで，本研究の目的として，滋賀県内中学校3校に対して「薬教育」を実践し，その授業前後のアンケート調査を実施し，授業前後での薬に対する理解度について調査した。さらに1校に対しては，3ヶ月後のアンケート調査を実施し，授業前後及び3ヶ月後の意識変容や行動化について調査した。

2. 研究方法

県内3中学校の3年生440名に対して，薬教育を実践し，その後，授業前後に12項目のアンケート調査（○，×の2つからの選択式）を行った。1つの中学校には，さらに授業3ヶ月後に同様の調査を実施した。

3. 結果と考察

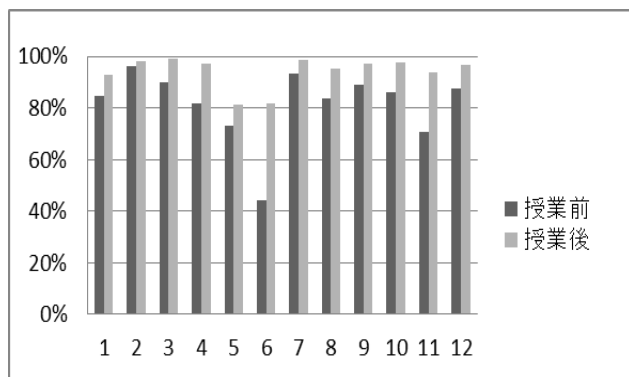


図1：中学校3校の授業前後のアンケート結果の正答率

中学校全3校の12項目における授業前後のア

ンケート調査の結果，授業前の平均正答率が82%だった。授業前の意識として，「怪我や病気になれば，すぐ薬を飲んでしまう傾向があること」等が考えられる。その結果から，医薬品の授業を実験やパワーポイントで行った。すると，授業後の正答率は，94%まで高まった。要因として，薬について持っていた意識が改善され，薬の使用法や知識を理解したことが正答率向上したと考えられる。

さらに，S中学校の結果も全体の平均正答率が10%高まり，3ヶ月後の結果は，授業前よりも高く，授業後とほぼ横ばいの結果となった。上田²⁾は，事前調査で正答率が64%だったが，医薬品の授業を行った結果，正答率が90%高まったと報告している。従って，本研究は，授業前後の意識変容が高く，薬教育が生徒にとって有効であったと考えられる。

4. まとめ

全12項目のアンケート調査の結果，授業前後で正答率が10%向上した。S中学校の3ヶ月後の結果は，授業前よりも高く，また授業後とはほぼ横ばいの結果が出た。このことから，薬教育が有効であったと言える。

引用・参考文献

- 1.) 文部科学省 (2008) 「中学校学習指導要領」。東山書店. (1) 156-157, 160
- 2.) 上田 裕司 (2013) 「中学校学習指導要領による医薬品に関する授業実践研究」。学校保健研究. 55 (3) 220-227